慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	クライスト 2001/2011 : 21世紀最初の10年とクライストの諸作品
Sub Title	Kleist 2001/2011 : Die ersten zehn Jahre des 21. Jahrhunderts und Kleists Werke
Author	大宮, 勘一郎(Omiya, Kanichiro)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2013
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.30 (2013. 3) ,p.164- 178
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20130331-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

クライスト 2001 / 2011

―― 21 世紀最初の 10 年とクライストの諸作品――

大宮勘一郎

Zeittafel

2001 年

9 月 11 日　イスラム過激派による反米テロリズム

10 月　米軍アフガニスタン侵攻（タリバーン掃討）

2002 年

1 月　Euro 流通本格化

10 月　パリ、モスクワでテロ

2003 年

3 月　合衆国、英国などの連合軍、イラク侵攻、フセイン政権「放伐」

4 月 SARS 流行

2004 年

12 月　スマトラ沖地震

2005 年

3 月　スマトラ沖地震

8 月　ハリケーン「カトリーナ」合衆国南部上陸

2006 年

2 月　ムハンマド風刺画への抗議運動

5 月　インドネシア地震

2007 年

7 月　新潟中越地震

8 月　ペルー沖地震

9 月　スマトラ沖地震

2008 年
5 月　四川大地震
11 月　バラク・オバマ合衆国大統領に当選
同　ムンバイで大規模テロ
2009 年
4 月　オバマ、プラハ演説「核兵器廃絶」宣言
6 月　WHO、新型インフルエンザにパンデミック宣言
9 月　サモア、スマトラ沖で地震
10 月　バヌアツの地震
2010 年
1 月　ハイチ地震
2 月　チリ地震
3 月　モスクワ地下鉄テロ
4 月　アイスランド火山噴火
2011 年
1 月　チュニジア「ジャスミン革命」、中東諸国に連鎖
2 月　ニュージーランド地震
3 月　東日本大震災、福島原子力発電所事故
5 月　アル・カイーダ指導者ビン＝ラディン、アメリカ軍によりパキスタンで殺害
7 月　ノルウェー、極右青年による単独テロ
9 月　ニュー・ヨーク、ウォール街で示威行動

2001 年から 2011 年までに起こった出来事から、自然災害（地震、暴風雨、疫病など）のうちで被害規模の大きなものと、政治的出来事を抜粋してみた。このうち自然災害として挙げたものは、主に直接的な予測が難しく突発的なもの、具体的には疫病と暴風、それに地震に限定している。旱魃、異常な温暖、異常な寒冷などは入っていない。また、もちろん抜け落ちているものはたくさんあり、選択の基準もさほど厳密ではないことをお断りしておかねばならない。

この年表から何が見えてくるだろうか。[1)]

第一に目立つのは、「非対称性 Asymmetrie」ということであろう。この言葉は説明を要する。例えば、20 世紀にはまだ行われていた、国と国とが当事者として、国力の差はあっても同じ地位同士で争うような「戦争 Krieg」の古典的な型を踏襲している紛争は、21 世紀の 10 年間には殆ど起こっていない。2003 年の米英が中心となったイラクへの侵攻が辛うじて唯一「イラク戦争」と呼ばれる程度で、他には狭い意味での「戦争」はない。では世の中平和かといえば、まるでそうではないのは周知のとおりである。[2] 国家を当事者としない紛争、内乱、侵攻といった武力の行使は常に起こっていると言ってよい。しかもこちらのほうが断然主流なのである。そこでの非対称性とは、例えば紛争ならば一方が国家の正規軍で、他方これに反政府の民兵組織や義勇軍、さらには極端な場合一個人が相対しているようなものや、公的な地位を得ている組織体に単独ないし少数、あるいは何の認証もなく、組織としての持続性もなく、その場限りの集団で切り込んだりする出来事に認められるものを指す。但し、内戦のように一国内においてそもそも一体性が保たれていないものは、上掲の表には入れずにおいてある。

第二に見えてくるものは何だろうか。例えば大きな地震は、ここに挙げた他にも、世界中で頻発している。とりわけ環太平洋地域でのその発生頻度は、この 10 年だけでも振り返ってたどり直してみると驚くほどで、その都度多くの死傷者と避難民が出て、甚大な被害が生じている。まず見えてくるのはこのことであろうが、そこにとどまらずに、今度はそれを私たちがどう受け止めたかを見つめ直すとどうだろうか。報道などでは、被害

---

1) むろん真っ先に見えてくるのは、我々がこれらの多くを既に記憶にとどめていない、という皮肉な事実であるが、これについては詳述しない。

2) 既に 1960 年代前半にアーレントが 20 世紀を「戦争の世紀」であるよりも、むしろ「革命の世紀」となったと見抜き、その淵源をアメリカ革命とフランス革命の比較から論じたことを想い出すべきであろう。Vgl.: Hannah Arendt, *Über die Revolution*, München 2011, S. 18 (*Einleitung: Krieg und Revolution*) / *On Revolution*, New York 1963, p.8 (*Introduction: War and Revolution*)「自由 Freiheit」言説に関する合意喪失と荒廃が顕著な 21 世紀最初の 10 年は、少なく見積もってもこの延長線上にある。

は直ちに数量化（犠牲者数、被害戸数および金額）される。巨大な損失、という文脈が、どのような自然災害の後でも、すぐに表面化してくるのである。もちろんこれは必要不可欠なことでもあるだろう。それまでの生活を失った人々にとって、今後の生活基盤は常に重要であるに違いなく、そのためには包括的で大規模な経済復興が求められ、また、これに並行して次なる災害に向けての備えが、とはつまり同時に、そのための資金が求められる。こうして、さまざまな天変地異は、個々の、そして集団としての人間を襲った試練から、徐々にリスクとリスクヘッジという、経済活動とりわけ投資における確率計算上の枠組みに対する課題として受け止められるようになる。実際 2011 年の震災と津波に対して、私たちは、自分たちが負っているリスクに対してヘッジが不十分であった、と思い知ったのだった。

しかし、私たちはもちろん、私たちが身をもって体験した地震と津波について、このリスクとヘッジという言説で全てが説明できているわけではない、と感じてもいる。巨大地震と津波による家屋崩壊や防波堤決壊にしても原発事故にしても、単なる確率計算上の間違いだった、と考えることのできる者は恐らくいないであろう。ここに「運命」や「悲劇」といった表現が、本来の文脈から大幅に自由かつ時代錯誤的に借用される余地が生じる。そして次第に、それらが借用であることすら忘れられてしまう。こうして私たちは、大きな自然災害が起こるごとに、それらを「過酷な運命」「悲劇」と無造作に呼びならわすジャーナリズム言語の濁流にまみれて暮らすようになって久しい。

こうした劇的呼称とは裏腹なことに、私たちはもはや、それらが本来含意していたように、災厄を必然的なもの（「天罰」？）と思い込めるような神話的ないし応報的世界に暮らしているわけではない。1755 年のリスボンの大地震に神意を読み取ることが誤りであることを、カントが地理学的に地震発生原因を特定する仕方で論証したのが既に 200 年以上も前のことである。カントが特定した震源域はどうやら正しく、しかし作用因のほうは今日では間違いであることが明らかになっているが、重要なのは、地震を（神話的な因果応報でも宗教的劫罰でもなく）自然科学の因果論によって説明可能であると考えた点である。それでもカントによれば、人間は

地震のような制御し得ない自然の出来事に一種の崇高 Erhaben の感情を掻きたてられもするのである。[3)]

カントの議論においても認められるのも、やはり非対称性という主題である。但しそれは、さきの人間集団同士の間におけるそれではなく、自然の諸力と人間の能力との間の非対称性のことである。これに自覚的であることが、本来であれば自然との関わりにおいて必要とされる態度であろう。ところが、応報的言説は、私たちが自然の暴力に対して窮極的には無力であることを、むしろ糊塗するように働く。科学的知見の増大や精緻化にもかかわらず、そうした言説が繰り返し甦ることには、実は必然性がある。非対称性の露呈によって技術的合理性は、おのれの限界をその都度知ることになるが、このことは同時に、技術をその神話的起源に繰り返し連れ戻すことになる。というのも、限界を究め拡張しようとする技術の本性には、有用性のみならず ― 有用性ではなく ― 逸脱・侵犯（Transgression）への無償の意志（人間の、ではなく、いわば技術自体の意志）が認められるが、そこにおける侵犯行為とは神話的な暴力性を誘い出し、それと出会うことを意味するからである。すなわち技術は、本性において出来事（すなわち非対称性の致命的顕在化）を恐れかつ求めるのであり、このことは技術の中に、「常に未だ」対象を欠いた、ante festum 的なものである「不安 Angst」を潜在させる。応報の言説は、このような不安が遂に対象と出会ってしまった際に懲罰恐怖へと転化したものであるといえる。[4)]

---

3) この点に関して Vgl.: Hartmut Böhme, *Das Steinerne. Anmerkungen zur Theorie des Erhabenen aus dem Blick des „Menschenfremdesten“*; Christine Pries (Hg.), *Das Erhabene. Zwischen Grenzerfahrung und Größenwahn*, Weinheim 1989, S. 160-192.

4) 不安（Angst）に関する考察は、フロイト後期の大きな課題であった。そこでフロイトは、„Angst“ の前置詞が „vor“ であることに注意を促している。Vgl.: Sigmund Freud, *Hemmung, Symptom und Angst; Gesammelte Werke*, Bd. XIV, London 1948. / Frankfurt a.M. 1991[7], S. 113-205, bes. S. 197f. 「不安は期待と見逃しえぬ関係にある。不安とは、何かを前にした〔vor〕不安である。不安には不確定性と没対象性という特徴が付き随う。正確な言葉の用法からすれば、不安が対象を見つけてしまえばその名は変わってしまい、不安の代わりに恐れ〔Furcht〕という。」

こうした逸脱・侵犯と応報・懲罰という神話的思考の執拗性は、その都度の罪過を「犠牲 Opfer」の供出によって贖う、という儀礼によって準備され強化され、ゆえに大きな災厄のたびに息を吹き返すのだが、他方非対称性についての自覚の欠如のほうは、繰り返し不問に付されてしまう。というのも、そのような自覚を常に持ち続けようとするならば、自分たちの生がどこまでも不安定なものだと認めることにもなるが、これは通常堪え難いことだからである。

*

2001 年から 2011 年つまり今年に至る 10 年間に焦点を当てて、1811 年に没したハインリッヒ・フォン・クライストについて考える、というのが本論の趣旨である。まさしくヘッジ不能なハイリスク作家の代表ともいえるクライストを、この 10 年に起こった事件の文脈に置いてみようとすると、奇怪なほどに収まりがよい。反帝国、反宗主国ゲリラ戦（戯曲『ヘルマンの戦い』や物語「聖ドミンゴ島の婚姻」）、地震（物語「チリの地震」）、疫病（戯曲断片『ロベール・ギスカール』や物語「拾い子」）などと、クライスト的主題をいくつか口にしてみるなら、ここにクライストのアクチュアリティのようなものを指摘することもできそうであるが、しかし、出来事の表面的対応関係だけに従って、「クライスト的な 10 年」と言って済ませてしまってはいけない、という強い戒めの気持ちが湧いてくるのも、心ある論者なら抑えることができないであろう。また、そこでクライストから読み取れるのが、上に述べた応報・懲罰的ないし神話的な枠組みとは別の思考であることにも気付くはずである。

そこで浮かび上がるのは、「分身」ないし「亡霊」というテーマである。先の枕噺において、二つの非対称性ということを話題としたが、そのどちらもが、単なる優勝劣敗の関係にあるのではないのだった。一方はいわば存在とその影のような関係にあり、他方は自然／人間の非対称性と、その人為的反復という関係にあると言えようか。そこで、クライストの作品中にこうした関係を探してみると、まず見出されるのは、自然／人間の非対称性の人為的反復の例である：

FREIBURG. So will ich es dir sagen. Sie ist eine mosaische Arbeit, aus allen

drei Reichen der Natur zusammengesetzt. Ihre Zähne gehören einem Mädchen aus München, ihre Haare sind aus Frankreich verschrieben, ihrer Wangen Gesundheit kommt aus den Bergwerken in Ungarn, und den Wuchs, den ihr an ihr bewundert, hat sie einem Hemde zu danken, das ihr der Schmidt, aus schwedischen Eisen, verfertigt hat.— Hast du verstanden?[5)]

フライブルク：　ならば言ってあげましょう。彼女は自然三界全てから組み立てられたモザイク作品なのです。その歯はミュンヒェンの少女のもの、髪の毛はフランスからの取り寄せ、頬の色つやはハンガリーの鉱山由来、あなたがたが誉めそやす身体つきは、鍛治屋がスウェーデン鋼から特製で拵えた肌着のお蔭。— おわかりですか？

これは 1807 - 08 年に書かれた『ハイルブロンのケートヒェン』に悪役として登場するクニグンデの身体の説明である。つまりは美と健康を粉飾している醜怪な女性、ということになろうが、飾ること自体が悪いことだとは本来なら言えないはずであろう。さもないと、あらゆる化粧や身繕いは邪悪につながることになる。確かにクニグンデは、権勢を我が物にするためには毒を盛ることも辞さない悪女という役柄を担っている。しかし、姿が醜いから心も邪悪なのだ、ということではあるまいし、逆に、悪人だから容姿も悪いのだ、ということもできないだろう。クニグンデには確かに強欲で悪辣な人物造形がなされているが、単なる懲らしめられるべき悪役、なのではない。この戯曲中で、粉飾を取った彼女の姿が露呈したり、描き出されたりすることは一度もなく、ただ、今の引用にある消息通らしき人物の言葉と、入浴中の彼女を誤って目撃したケートヒェンが言葉にならない驚愕と恐怖 Greuel を示すことから、およそどういうものか思い描かれることになるだけである。つまり、彼女の生来の容姿それ自身ではなく、容姿がその人為的粉飾によって過度に、すなわち負を目立たせなくする以上に矯正され隠蔽されているという事実の露呈が、その邪悪さを同時に示

---

5) Henrich von Kleist, Das *Kätchen von Heilbronn oder die Feuerprobe. Ein großes historisches Ritterschauspiel*, 5. Act, 3. Auftritt; *Sämtliche Werke und Briefe*. Münchner Ausgabe, München 2010, Bd. I Dramen, S. 613f. (MA Bd.-Nr., Seitenzahl)

すわけである。彼女の「醜怪」とは、過度の粉飾、つまり自然に対する強引でもあり周到でもある介入を指すのであり、生まれつき容姿に恵まれたか否か、ということとは次元を異にする。醜さは、粉飾という事実から予感され、そして最後に邪悪さと結合することになるのである。次の引用は、最終場面から。

> KUNIGUNDE. Pest, Tod und Rache! Diesen Schimpf sollt ihr mir büßen! (ab, mit GEFOLGE)
> DER GRAF VOM STRAHL. Giftmischerin![6)]
> クニグンデ：　ペスト、死、そして復讐じゃ！　この侮辱、貴様らには償ってもらおうぞ！（従者と退場）
> シュトラール伯：　毒盛り女！

……クニグンデについては、これで一体何かが解決されたのだろうか、と訝らざるを得ない、奇妙な結末である。むしろ対立の永続こそが必然なのだろうと推測するしかない。つまり、シュトラール伯＝ケートヒェンの体現する秩序世界とは別にクニグンデ的な世界が存続する。「復讐」、「償」いといった、まさに応報的な言葉を吐き捨てて去るクニグンデの退場はそのための潜伏であり、敗退や破滅ではない。恐らく、クニグンデは人間の存在する限り根絶しえぬ邪悪なのであろう。というのも、彼女また、自然に介入する人為的技術の怪物なのであるから。実際、クニグンデの邪悪さもまた、「毒」という極端な人為的手段を採るところで皆が知ることになるものであった。こうしたクニグンデの性格づけは、同じ悪役の女性と言っても、例えばヴァーグナー『ローエングリン』に登場するオルトルートなどとはずいぶん異なっている。クニグンデを、文明に対する未開と自然の抵抗としてとらえることはできない。合理化の徹底がそのまま「醜怪で邪悪」な彼女の本性＝ Natur（!）を、怪物的なものとしていわば焙り出す。それは同時に、技術に同化してゆくことで生身の人間が徐々に変容してゆき、身体という、自分にとって最も近しかったはずのものが、実は「不気

---

6) Ebd., 14. Auftritt, MA I, 627.

味な＝家郷ならざる unheimlich もの」であったという真相とともにいつか回帰せざるを得なくなる、合理的技術の本性でもある。クニグンデは、征服された異教世界を代表しているのではなく、むしろ非対称性を無視して技術と自然とが抑止不能なまでに絡まり合ってしまっていることの寓意である。

これと類似したモティーフをもう一つ。

THUSNELDA. Nun ja! Wie nutzen sie, bei allen Nornen!
Auf welche Art gebrauchen sie die Dinge?
Sie können doch die fremden Locken nicht
An ihre eigenen knüpfen, nicht die Zähne
Aus ihrem eigenen Schädel wachsen machen?
HERRMANN. Aus ihrem eigenen Schädel wachsen machen!
TH. Nun also! Wie verfahren sie? So sprich!
HR (mit Laune). Die schmutz'gen Haare schneiden sie sich ab,
Und hängen unsre trocknen um die Platte!
Die Zähen reißen sie, die schwarzen, aus,
Und stecken unsre weißen in die Lücken![7]

トゥスネルダ：　だってほら！　あの人たちはいったいどう使うのよ！
どうやってそんなものを用立てるのかしら？
できないでしょう、他人の巻き毛を
自分のに繋げるなんて、他人の歯を
自分の頭の骨から生やすだなんてこともね？
ヘルマン：　自分の頭の骨から生やすのさ！
ト：　ええ、じゃあ！　一体どうやって？　教えて頂戴！
ヘ（上機嫌に）：　汚い髪の毛は切り落とし、
俺たちの乾いた髪をその禿げ頭に垂らす！
自分の黒くなった歯は引っこ抜いて、

7) Kleist, *Die Herrmannsschlacht*, 3. Auftritt, V. 1042-1052, MA I, 673.

俺たちの白い歯を穴に埋める！

一八〇八年の『ヘルマンの戦い』から。ゲルマンの部族連合に栄光のローマ軍が敗北し、名将クウィンティリウス・ヴァールスが命を落としたという、紀元九年のトイトブルク戦役を舞台とし、その一見攘夷主義的な内容から、傾向的作品と看做されていたことは周知のことであろう。「あの人たち（sie）」というのは、ローマ人たち。ゲルマンの族長ヘルマンの妻トゥスネルダにローマの使節ヴェンティディウスがローマ風の着飾り方を指南してくれ、その姿をしたままのところにヘルマンが戻り、彼が思うところのローマ人の「魂胆」を妻に教える場面である。ゲルマンの女性たちの美しい金髪と白い歯を奪い取ってローマ人の黒くて脂っこい髪の毛と汚い歯の代わりにするのだ、そのために言い寄ってくるのだ、というのである。

身を飾るために技術・技巧を過度に動員することから見えてくる不気味さ、という文脈は一緒だが、これがこの戯曲では帝政ローマに帰せられている。ナポレオン戦争という時局的理由から「搾取」が強調されているが、特殊時代的な装いを取り除けば、身体の人工的粉飾とその産物としての不気味、という主題はクニグンデの場合と同じと言えるだろう。

ゲルマーニアに進出してきたローマ軍が辿る末路もまた、人為と自然の技術による結合が解かれてしまった場合の運命を体現している。彼らは、自分自身の裸形の身体と致命的な形で出会うのである。ヴェンティディウスは、トゥスネルダの計略に誘われて、ヒェルスカの雌熊が囲われている柵の中に閉じ込められ、食い殺されることになるが、固有の身体が「食われるもの」としてここに回帰する、ということであろうか。手負いの将軍ヴァールスもゲルマンの武将フストとの決闘に臨み敗れるが、名将の最期には一見相応しからぬそのあっけなさは、ローマ的技術の装甲を失った生身の身体の虚弱ぶりを印象づける。

さて、自然と人間の間の非対称性を人為的技術によって克服するという、呪術や魔術にまで遡れる企ては、『ヘルマンの戦い』において、もはやクニグンデのような個人的能力によってではなく、ローマによって担われ、より大規模な帝国的編成のもとで遂行される。

そこに、忘却されて来た非対称性が政治的非対称性として回帰するので

ある。末尾においてローマへの進軍を呼びかけるヘルマンの台詞には、報復や懲罰といった考え方は読み取れない。そこにあるのは、「ローマ（的なもの）」とどこまでも戦い抜く意志であり、その意志は個人や世代を超えて伝わり広がる。

HERRMANN. (…)
Und dann – nach Rom selbst muthig aufzubrechen!
Wir oder unsre Enkel, meine Brüder![8)]
ヘルマン：　（…）
それから — ローマその地へと勇躍進軍する！
我らもしくは我らが子孫だ、我が兄弟たちよ！

ここに描かれるのは、友敵関係の絶対化と永続化である。しかしそれだけに、ローマ／ゲルマーニエンという両者の関係は、単に体制を異にする二国間のそれではなく、より原理的な水準にまで高められて考えられているのである。一方が自然と人為の非対称性を合理的技術によって制圧しようとする帝国的機構であるのは明らかだが、では、他方すなわちゲルマーニエンは、どのような組織化がなされているのだろうか。

『ケートヒェン』に戻ると、クニグンデの技術に対置されるのは、「共感覚 Sympathie」である。シュトラール伯とケートヒェンは、結末においては結婚することになるが、そもそも両者を結びつけていたのは「忘我」と「夢」であった。ケートヒェンは我を忘れて伯爵につき従い、伯爵は皇帝の娘と結婚する夢を見て、見当違いな方向でその実現を探る。いうなれば最後にこの両者のピントが合う形で劇は終わる。理性的なコミュニケーション以前の意思や感情の疎通能力に対する関心は、博物学者ゴットヒルフ・ハインリッヒ・フォン・シューベルトに関心を持っていたクライストやロマン主義者に共通なもので、ここに深入りするとオカルトめいてくるので避けたい話題ではあるのだが、クライストはこの議論に、啓蒙主義のいう理性的対話によって形作られる公共性、というのとは別の仕方で政治

8) Ebd., letzter Auftritt, V. 2630-2631, MA I, 744.

的存在としての人間を組織化する契機を見出していたといえる。これもよく引用される書簡体エッセイ「語りながら徐々に思考が仕上がってゆくことについて」の一節：

> Denn nicht *wir* wissen, es ist allererst ein gewisser *Zustand* unsrer, welcher weiß.[9)]
> というのも、我々が知る、というのではなく、知るのは何よりもまず我々のある特定の状態なのだから。

「状態」とは、「私」や「我々」の外側にあって一方的に作用してくるものではない。「私」も「我々」も、空(から)の入れ物のようなもの、ないし作用の受動的な対象として考えることはできない。「状態」とは、「私」や「我々」以前あるいは以後のもの、「私」や「我々」をその中に溶かし込んでしまうようなものである。そのような「状態」こそが「知る」という動詞の主語すなわち「知る」ことの主体なのである。共感覚とは、こうした「状態」を駆け巡り、それを個々に伝え、また個々が伝え合うネットワークのようなものと考えられる。実際、クライストの作品では、『ホンブルクの公子フリードリヒ』の主人公が典型であろうが、こうした「状態」の知に駆られる人物が多く登場する。族長ヘルマンにしても、ローマとの開戦を最初から確信ないし覚悟していたわけではなく、彼らを取り巻く状態の緊張の高まりに感応しながら、その都度の行動を決めているので、不動の英雄人格のようなものを求めて読む眼差しには、優柔不断な人物にしか見えない。

状態に対して感応する力というのは、例えば一気の決断が求められるような場面には非常に重要である。クライストの作品に病的と見える人物が多く登場するとしても、それは、技術的合理性によって秩序化された生に馴染むことがない、という意味において、あたかも病んだもののようにみえるだけである。かれらが見せる病的症状は、むしろ「状態」に対する感受性の高さを示している。そのような彼らの姿に着目することで浮上して

---

9) Kleist, *Uber die allmähliche Verfertigung der Gedanken beim Reden*, MA II, 289.

くるのが、「状態」の組織化という問題なのである。合理的秩序とは違った仕方で生の秩序化が求められるなら、彼らこそがその手掛かりとなるべき人物たちである。

クライストの作品をつぶさに読むなら、そこに書かれているのは、単なる狂乱や単なる異常事例ではないことがわかる。例えば『ペンテジレーア』がギリシャ神話を題材にした悲劇であるとしても、主人公は女王の座を最後まで決して失うことがない。戦場において恋人アキレスを食い殺す、という表向きの「狂態」にもかかわらず、ではなく、まさにこの行為ゆえに、彼女は紛れもないアマゾン族の女王として、神々からの認知を最後に受けることになるのだから。つまり、見かけとは裏腹に、ここには悲劇的主人公の破滅の原因とされる「狂愚（アテー）」も、高貴な者の「過ち（ハマルティアー）」も、それらによる排除も、病も、ない。あるのはただ、正しく行われた行為と、それゆえの王者の正しき死だけなのである。[10)]

軍神マルスの由緒に連なり、子孫が望まれる時期の到来するその都度に出陣する、単性的共同体アマゾン族は、『ヘルマンの戦い』における「ゲルマーニエン」もそうであるように、原理的に不滅である。女王ペンテジレーアの死という状態によってアマゾン族にもたらされる「知」とは、アマゾン族のこの不滅なのである。決戦場におけるペンテジレーアは、おのれとアキレスとの婚姻が有事抜きになされたならば、アマゾン族にとってより大きな災厄を招くであろう、という直観を確かに得ている。ありうべきその災厄とは、父権的秩序を体現するアキレスの支配下に入り、アマゾン族という秩序が解体してしまうことであろう。そのとき、原理としての「アマゾン」は、無秩序的に拡散することになる。そのようなことになれば「アマゾン」は、あらゆる秩序から解き放たれた、病の「症状」と化してしまう。「アマゾン」や「ゲルマーニエン」を「秩序」として繰り返し

---

10) ゆえに、『ペンテジレーア』において「死の欲動 Todestrieb」のようなものを語ろうとするとしても、それは、王の過ちとしてでもなければ、王位と衝突も拮抗もすることない正しき王の正しき死として、限りなく純粋に実現しているのだと考えねばならない。そして、アマゾン族という共同体もまた、「存在」の試練のごときものに晒されているわけではないのである。

描き出すクライストは、決してそのような無秩序化を望んでいたのではない。例外的な「状態の知」に、自らも駆られているクライストは、「アマゾン」、「ゲルマーニエン」さらには「ドイツ」が体現する原理を、由々しき「症状」ではなく、れっきとした秩序構成的な原理へと高めることを模索している。アマゾン的秩序の創設が反復される『ペンテジレーア』の最後は、このような模索がやまず、繰り返し続けられることの必然性を告げるのであり、断じてアマゾン的秩序の崩壊や断絶を描いているのではない。『ヘルマンの戦い』において、「ゲルマンの王 König von Germanien」への即位を次回の民会（！）にまで先延ばしにしたヘルマンに率いられるゲルマンの軍勢もまた、その濃密な男性結社的雰囲気にもかかわらず、父親ないし父権的なものの共同体への組み入れを極小化する『ペンテジレーア』のアマゾン族からさほど遠くないところにいる。

逆にこうした新たな秩序構築がいかに妨げられ挫折するかをきれいに描いた例として、「チリの地震」を挙げることができるだろう。それはもちろん、群衆に潜在する力（構成的権力？）が教会によって中枢的秩序へと立ち戻らされることによる失敗であった。とはいえ、あの群衆の力が別の仕方で別の方向へと自らを組織化することはできないのだろうか —「チリの地震」を書くクライストもやはり、最後にはこう考えたはずである。すなわち、非中枢的・離散的な生の秩序化は可能なのだろうか、と。

「チリの地震」においては、イェロニモとヨゼーフェという主人公二人はあえなく撲殺され、また、彼らを護ろうとした貴族ドン・フェルナンドの幼い息子も教会の柱に叩きつけられて命を失う。これに対して、主人公の一方であるヨゼーフェの子は生き残り、この子をドン・フェルナンドは引き取ることになるらしい、というところで物語は終わっている。そこにはこう書かれている。

> Don Fernando und Donna Elvire nahmen hierauf den kleinen Fremdling zum Pflegesohn an; und wenn Don Fernando Philippen mit Juan verglich, und wie er beide erworben hatte, so war es ihm fast, als müßt er sich freuen.[11)]

---

11) Kleist, *Das Erdbeben in Chili*, MA II, 163.

ドン・フェルナンドとドンナ・エルビーレはそれから、この小さな見ず知らずの子を養子として引き取った。そしてドン・フェルナンドがフィリップとフアンを、そして両者をいかに儲けたのだったかを比べれば、あたかも喜ぶべきであるかのように思われた。

この一文の言わんとしていることは、読者を非常に戸惑わせるものである。私たちの実感から遠く隔たったこの奇妙な交換の論理が、クライストには時に現れる。しかし、これは喪失とその埋め合わせに関する論理ではない。ましてや犠牲・贖罪の神話的論理などを無理に読み込むべきではない。

他の作品「O…侯爵夫人」や「拾い子」、また『ペンテジレーア』などを引き比べるなら、当然「父の不確実性」を肯定的にとらえるという、クライストに多く認められる考え方の反映でもあるだろう。とはいえ、むろんここに言われているのは、実の子でなくとも構わない、ということでも、実の子以外なら誰でも構わない、ということでもない。実子を失ったところで得られた庶子的な存在に託されたのは、実子の代理などではなく、家父長的秩序に遂に馴染むことのない思考と行為の担い手であり、そのような存在が中枢的な地位に参入することによって、従来の秩序が新たに組み変わってゆくことへの希望であろう。同時にこれは必然でもあるのだ。

正嫡関係からなる家族共同体に代わって、非家族的な存在を中心に据えた共同体が、いわば前者の分身のように生き始める。こうした共同体を仮に「ゲルマーニエン」と呼ぶとして、しかしクライストは、この共同体の「帝国」に対する徹底抗戦のようなものを呼びかけた作家だったのではない。「ゲルマーニエン」とはむしろ、人為と自然の間の非対称性の、技術による制圧が進む諸段階において生み出される、新たな非対称的存在なのである。ゆえにそれは、「帝国」的なものの存在するところでは、必ずその傍らに息を潜める。両者は不可分なのであり、クライストの作品は、このことを精確に記述し続けている。その意味で、アキレスとペンテジレーアの恋も、常に既に成就しているのであり、またその裏返しとして、「拾い子」のピアッキとニコロの闘いも、現世を超えて永続しなくてはならないのである。